

1. 評価結果概要表

作成日 平成20年12月 5 日

【評価実施概要】

事業所番号	2672200066
法人名	社会福祉法人みねやま福祉会
事業所名	グループホーム もみじ
所在地	〒627-0021 京都府京丹後市峰山町吉原73番地 (電 話) 0772-69-5300

評価機関名	社団法人京都ボランティア協会		
所在地	京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル海湊町83-1 ひと・まち交流館 京都1階		
訪問調査日	平成20年11月19日	評価確定日	平成20年12月 5 日

【情報提供票より】(平成20年10月1日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 14 年 4 月 20 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	9 人	常勤 7 人, 非常勤 2 人, 常勤換算	8.5

(2) 建物概要

建物構造	木造
	2 階建ての 1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	18,000 円	その他の経費(月額)	円
敷 金	有(円)	〇無	
保証金の有無 (入居一時金含む)	〇有(10万円) 無	有りの場合 償却の有無	
食材料費	朝食	円	昼食 円
	夕食	円	おやつ 円
	または1日当たり 1200 円		

(4) 利用者の概要(10 月 31 日現在)

利用者人数	9 名	男性	3 名	女性	6 名
要介護1	4 名	要介護2	4 名		
要介護3	1 名	要介護4	0 名		
要介護5	0 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 86.8 歳	最低 67 歳	最高 98 歳		

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	財団法人丹後中央病院
---------	------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

北近畿タンゴ鉄道峰山駅から車で5分、峰山小学校の真向かいにグループホームもみじがある。新築木造の「家」である。地域住民の理解と協力が十分得られており、食材買い物にスーパーへ行くことを初め、地域の社会資源を十分活用している。家族との関係にも力を入れており、広報誌『もみじだより』には行事や利用者の写真が豊富に掲載されている。職員はこの1年間異動がなく、20歳代から60歳代までの男女あわせて9人の職員の仲が良く、チームワークも良く、管理者への信頼感が厚い。利用者にもむきあって理念を実践しようと、ホームでの職員が流れるように動いている姿が清々しい。ホームに併設して児童養護「もみじの家」があり、そこにいる子どもたちとの交流も利用者には楽しみである。丹後こしひかりで炊いたピカピカに光ったご飯、畑で採れた野菜を使ったこの土地らしい献立は絶品である。こうした環境で利用者は一人ひとりしたいことをしながら、個性的に自由に暮らしている。農村地帯におけるグループホームのモデルを具現化している。

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)
	前年度の評価での指摘について、理念を策定、運営推進会議の充実、家族との関係に力を入れる、東京センター方式の導入、脳トレーニングの実施等、非常に積極的に改善されている。
重点項目②	今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)
	毎年受審なので、職員は外部評価に関して認識が深く、自己評価は職員全員の意見をまとめている。
重点項目③	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)
	要綱はないが、家族、区長、組長、福祉委員、京丹後市保健福祉部高齢者福祉課職員がメンバーとなり、定期的に関係され、記録が残されている。毎回活発な意見交換があり、地域情報を得るとともに、意見により改善している。利用者の外出の状況、食事の献立は誰が考えているのか等々にたいして、広報誌『もみじだより』に献立の写真や利用者の外出のときの写真を掲載している。
重点項目④	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)
	運営推進会議も含めて、家族からの意見はほとんどない。家族には遠慮があるのだろうと思っている。ホームを訪れる家族は決まっている。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)
	区に加入し区費を払っている。公民館の行事には参加し、文化ホールに大正琴のコンサートを聞きに行ったり、図書館の利用もしている。すぐ近くの峰山小学校の運動会を見に行っている。畑で採れたもので地域の人を招いて収穫祭をする。法人が今年度の重点目標に地域貢献を掲げているので、今後は学童保育的なことができないかと考えている。

2. 評価結果(詳細)

(部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	法人の理念は「管理より生活を」であり、それを踏まえて職員が話し合い、「お婆さんと一緒に笑おう」をグループホームもみじの理念とし、ホーム内に掲げている。それに伴って「お婆さんの話を聞こう」「家族にお婆さんの事を話そう」「地域の人にお婆さんの話を聞いてもらおう」「職員同士お婆さんの事を話し合おう」の4つの目標を決めて実行している。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	理念は職員が話し合ったものであり、会議でも常に確認しあっている。職員は利用者と同じく向きあい、会話のなかから利用者のしたいことを引き出している。ホーム内は家庭的な雰囲気を重視しており、利用者の認知症の周辺症状が落ち着いている。		
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	区に加入し区費を払っている。公民館の行事には参加し、文化ホールに大正琴のコンサートを開きに行ったり、図書館の利用もしている。すぐ近くの峰山小学校の運動会を見に行っている。畑で採れたもので地域の人を招いて収穫祭をする。法人が今年度の重点目標に地域貢献を掲げているので、今後は学童保育的なことができないかと考えている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	毎年の受審なので、職員は外部評価に関して認識が深く、自己評価は職員全員の意見をまとめている。前年度の評価での指摘について、理念を策定、運営推進会議の充実、家族との関係に力を入れる、東京センター方式の導入、脳トレーニングの実施等、非常に積極的に改善されている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	要綱はないが、家族、区長、組長、福祉委員、京丹後市保健福祉部高齢者福祉課職員がメンバーとなり、定期的開催され、記録が残されている。毎回活発な意見交換があり、地域情報を得るとともに、意見により改善している。利用者の外出の状況、食事の献立は誰が考えているのか等々にたいして、広報誌「もみじだより」に献立の写真や利用者の外出のときの写真を掲載している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	京丹後市のよびかけで、2カ月に1回開催される地域密着型サービス事業所会議に参加し、情報交換したり、悩み相談したりしている。京丹後市の介護教室の講師は法人で引き受けている。グループホームもみじとしても、今後は介護相談や認知症キャラバンメイトの講師をしていく予定である。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	行事の写真や運営推進会議の様子などを掲載した広報誌『もみじだより』を毎月発行し、家族に送付している。遠方においてあまり面会にこられない家族には毎月電話連絡している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議も含めて、家族からの意見はほとんどない。家族には遠慮があるのだろうと思っている。ホームを訪れる家族は決まっている。	○	遠方であろうとも、介護計画の話し合いなどにはぜひ家族にホームに来てもらって、情報交換することが望まれる。そういった関係づくりのなかから、家族からの忌憚のない意見が出てくると思われる。
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	過去1年間、職員異動はなく、落ち着いた運営が実施されている。異動の場合には広報誌に掲載したり、利用者や家族に説明している。職員にとって居心地のよい職場を心がけている。法人全体としては、認知症介護について、当ホームで研修し、力をつけていくという任務を負っている。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内には系統的な研修計画があり、実施されている。外部研修は認知症ケアマネジメント、認知症ケア、歯科指導者研修、急変時対応等々を受講しており、グループホームの全国フォーラムにも参加している。資格取得には勉強会で支援している。半年に1回、管理者は職員と面接し、職員一人ひとりの課題を話し合い、レベルアップするように支援している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	京丹後市内のグループホームが2カ月に1回、管理者交流、それ以外の月に介護職員交流会を実施しており、職員が交代で参加している。会場はグループホームの持ち回りなので、他のグループホームを見学することができ、職員に励みになっている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	家族だけが見学して利用を決めた人もいるが、ほとんどの利用者には見学した後に利用を決めてもらっている。利用が始まったときには、利用者同士の関係性に最も気を遣っており、新しい利用者を見守ったり、横にいたり、じっくり話を聞くなどしている。2時間も話した利用者もいる。		
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	はばめしなどの郷土料理、畑仕事、ことわざ、昔の言い伝え等々、職員が利用者から学ぶことは数多くある。認知症とはどういうものか、認知症の人のケアはどうしたらいいのか、認知症の人のなかにどうしたら入っていけるのか等々、利用者との会話のなかで日々新しい発見をしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用開始にあたっては、管理者とケアマネジャーが面接し、フェイスシート、医療情報、介護サービス情報等々を収集している。利用開始のちアセスメントをとり、担当職員を決め、介護計画の原案を会議にかけ、職員が検討している。東京センター方式のアセスメントに挑戦し始めているが、利用者の生活歴の情報が少ない。	○	利用開始時には情報が少ないとしても、毎日の生活のなかで、利用者が話すことを記録に残し、生活歴の補充情報として、個人ファイルに残すことが望まれる。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	ケアマネジャーが作成した介護計画を、会議において職員全員が検討している。家族の意向は十分配慮されており、また居宅のケアマネジャーの意見も反映している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	ケース記録には介護計画の実施とその際の職員による観察、利用者の発言や表情を書いているが、介護計画の項目に沿った書き方ではないので、モニタリングの根拠にはならない。状態変化がない場合でも半年ごとに介護計画の見直しをしているが、その際に介護計画の評価と再アセスメントが実施されていない。	○	ケース記録は介護計画の項目に沿って書くとともに、介護計画の見直しにあたっては、評価と再アセスメントを行うことが望まれる。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	家族の要望にはできるかぎり対応している。併設の児童養護施設「もみじの家」の子どもたち(3歳～5歳)は始終遊びにきており、利用者と一緒に畑で芋ほりしたりする。また利用者が子どもたちに読みきかせをしている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科医や歯科医への定期的な通院は家族にお願いしているが、家族が同行できないときや緊急時は職員が同行している。与謝の海病院の認知症専門医と連携し、相談している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	ターミナルケアについては、できるだけのことをしたいと考えているが、明文化された方針やマニュアル等はない。医療連携に苦慮しており、今後の課題と考えている。	○	利用者の重度化が進まないうちに、利用者や家族の意向をじっくりと聴き、職員同士の十分な話し合いのもと、基本方針を決め、明文化することが求められる。医療連携については社会問題とはいえ、法人としてぜひ取り組んでみたい。
1. その人らしい暮らしの支援 (1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	部屋のドアやトイレのドアの開けっ放しはなく、部屋に入るときはノックも守っている。トイレ誘導の声かけにも十分注意している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	おおよその日課は決まっているが、起床も就寝も利用者に任せている。早く起きた人は先に朝食をすましたり、朝食準備を手伝ってもらったりしている。食事の時間も利用者ごとにまちまちで、ゆっくり食べる人もいる。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立の希望は利用者からはなかなかでないが、一緒に食材の買い物に行くと、「今日はこれにしよう」というふうが決まる。お誕生会には本人の好きなものを提供する。やきそばやお好み焼きをしたり、おやつは手作りである。利用者の食べ慣れた和風献立であり、地元の食材や畑で採れたものを使っており、「はばめし」など地域性の感じられる献立である。利用者と職員が共に食事している雰囲気はまさに家庭である。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	浴室は利用者にとって、家庭的でゆったりと落ち着ける場所となっている。希望者は毎日入っており、マンツーマンの同性介助である。ゆず湯やしょうぶ湯などの楽しみもある。今後は同法人の特養の大きなお風呂に入りに行くことも考えている。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	調理の下ごしらえ、もりつけ、配膳、食器洗い等食事の準備は職員とともに利用者が率先しておこなっている。毎回お茶を入れる担当の利用者がいる。訪問当日はお正月用のあずきを選んでいた。食材買い物も交代で行っている。畑作業、水耕栽培、編み物、縫い物、書道、花札等を楽しんでいる。毎日新聞を読む利用者や学習療法に熱中している利用者もいる。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	近所の公園に散歩、買い物、畑に行くなど、利用者は毎日外に出ている。楽しみのお出かけとしては、電車に乗って天の橋立に行き、船に乗ったり、経が岬、伊根町など丹後半島一周のドライブに行ったりしている。利用者が住んでいた家に行き、出会った近所の人とおしゃべりをし、庭に咲いている花を持ってくるなど、利用者の個別外出にも取り組んでいる。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	ホームは玄関のみならず、廊下、居室など、どこからでも自由に外に出ることができる。利用者は気軽に自由に外に出て、車の往來を見ていたり、落ち葉を掃いていたりしている。職員が気がつけば見守ったり、同行したりしているが、知らない間に家に帰っていた利用者もいる。道を歩いていれば、地域住民の協力は得られ		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	消火器、感知器、防火管理者の設置があり、ホーム内の避難訓練は毎月実施している。災害時の地域との連携は、「災害時における要援助者の避難施設としての使用に関する協定書」が法人、京丹後市、地域住民との間で締結されている。備蓄の準備が望まれる。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の食事摂取量と、注意が必要な利用者の水分摂取量が記録に残されている。毎日の献立のカロリー値と栄養バランスについての点検は記録にない。	○	毎日の献立の簡単なカロリー値と栄養バランスについて、職員のコメントでも、法人の管理栄養士のコメントでも、記録に残すことが望まれる。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関口を入ると、土間に下駄箱、上がり口と居間との間にある木製の衝立には、利用者の古着をほどいてかけ、センスのいい飾りともなっている。広い居間兼食堂のまわりは畳コーナー、スタッフ室、板の間等が囲んでいる。観葉植物の鉢がたくさん置かれ、雪に閉じ込められる季節にも緑を提供している。カウダーにはからすうりの実、まつぼっくりでつくった飾り、食卓には小菊の一輪挿しが飾られている。床暖房、椅子には座布団を置くなど、寒い地方らしい。椅子の足にも毛糸で編んだカバーを履かせているのもほほえましい。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	部屋の大きな窓から利用者の見慣れた景色が外に広がり、季節を感じる。バルコニーには洗濯物を干したりしている。室内にホームこたつ、たんす、衣装掛け、時計、カレンダー等、使い慣れたものを持ち込んでいる。かつての一家の写真や幼いころの子どもたちの写真、成人式の写真、生まれた孫の写真等を貼っている。亡き夫をモデルにしてつくったちぎり絵、かつて厚生関係の京都府代表であったときに島津久さんからもらった額など、すべて輝いていたときの誇りである。		